

英語の単複同形について*

松 瀬 憲 司

On the Base Plural in English

Kenji MATSUSE

(Received October 1, 2010)

Base plurals already existed in Old English; they had lost their original inflectional ending. However, there was no inconvenience for them to function without any indication of their grammatical number, because the inflectional systems in Old English were intact. In Middle English, the corruption of the inflectional systems brought about regularizing plural forms, but a handful of them resisted the trend in terms of analogical extension or the conserving effect of high token-frequency. Among them were several base plurals which survived the competition with other phonologically or morphologically similar lexical items. In addition, when Modern English started to be standardized, some irregular grammatical assets including these base plurals had the potential enough to be symbolically used as prestige markers. That is why we still have base plurals in Present-day English in spite of their morphologically invisible plurality.

Key words : base plural, analogical extension, high token-frequency, standardization, prestige

1 はじめに

「語形変化／屈折 (inflection)」には、名詞・形容詞に関わる変化 (declension) と動詞に関わる変化 (conjugation) がある。印欧語では、前者は、「性 (gender)」・「数 (number)」・「格 (case)」の各文法的機能に応じて品詞の形を変え、後者は、「数」・「時制 (tense)」・「法 (mood)」・「人称 (person)」に応じて形を変えることを指す。印欧語とはかけ離れた日本語を使う我々からすれば、「性」が最も理解し難い概念であることに間違いはないが、実は、英語においてでさえ、一面単純に見える単数か複数かといった「数」の概念表示もそれに負けず劣らず複雑な様相を呈する（そのことは「数」概念のみが文構造の主要部である名詞・動詞の双方に渡って見られることに典型的に現れる）ので、それは、名詞と連動する不定冠詞（・定冠詞）の用法も含めて、我々には非常に取っ付きにくいものとなっている（野村 2005: 14; Jarvis & Pavlenko 2008: 138-139; Gally 2010: 87 & 98 参照）。

ところで、Whorf (1956 [1941]) は、印欧語（特に Whorf の言うところの SAE）での「数」の捉え方を、北米大陸の土着言語のひとつであるホーピ語 (Hopi) のそれと比較しながら、次のように総括している。

- (1) A category such as number (singular vs. plural) is an attempted interpretation of a whole large order of experience, virtually of the world or of nature; it attempts to say how experience is to be segmented, what experience is to be called "one" and what "several".
— p. 137
- (2) It was evident that the category of plural in Hopi was not the same thing as in English, French, or German [= Standard Average European: SAE]. Certain things that were plural in these languages were singular in Hopi.
— p. 138
- (3) In our language, that is SAE, plurality (and cardinal numbers) are applied in two ways: to real plurals [= perceptible spatial aggregates: ex. *ten men*] and imaginary/objectified plurals [= metaphorical aggregates: ex. *ten days*].
— p. 139

つまり、SAEでは、ホーピ語と違って「メタファー」を用いてまで普通名詞にできるものは、そうするのであり、その結果その複数形も作られるのである。それは、安井 (2010: 119) が指摘するように、*ten days* のような

『時』という抽象的な概念を理解し、ことばで表出するためには、つねに、わたしたちが存在しているこの『三次元空間』で目にすることができる具体的なもの¹⁾に置き換えて認識せざるを得ない」からである。そしてSAEに属する英語の場合、それでも「数える」という行為に耐えられない「かたまり名詞 (=物質名詞)²⁾」などについては、特別な場合に例外的に複数形をとることを除いて(野村 2005: 15の「Wierzbickaによるスケール」参照)、一般に a piece of や a cup of などの「数えられる形式・容器と共に使用する」か、デフォルトである「単数形」として処理することになる。

ここで、英語における「数」概念の表示法をまとめてみると、a book/ booksのように単数形と複数形が通常のペアをなす一般的なパターン以外に、「複数形の存在の有無」をめぐる、以下のような特殊なパターンが存在することがわかる。

	複数形の存在の有無	呼応関係: 例
(4)	複数形が無く、単数形のみ存在	→ a. 単数概念のみ表示: かたまり名詞 → b. 単数形が複数概念も表示: 単複同形
(5)	単数形が無く、複数形のみ存在	→ a. 単数表示も可能な複数概念: 集合名詞 → b. 複数形が複数概念のみ表示: 対になった器具等

そこで本稿では、上述のように「数」の表示にこれほどこだわる言語にしては、その存在が特に異様に映る(4b)の「単複同形 (base plurals [Huddleston & Pullum 2002: 340])」という形式に焦点を当てて議論する。

本稿の構成は次の通りである。次節と3節では、主に Huddleston & Pullum (2002) と久野・高見(2009)により、現代英語 (Present-day English: 以下 PDE と略記) における特異な「数」の表示法全般を確認した後、その中で特に単複同形の分布を議論する。さらには、SAE 古典語や古英語 (Old English: OE)・中英語 (Middle English: ME) での単複同形の実態についても3節で言及する。続く4節では、前二節で浮かび上がってきた様々な問題点から PDE における単複同形の存在を考察し、最後の5節で、全体をまとめ一定の結論を得ることにする。

2 PDE における「数」概念と形式のミスマッチ

Huddleston & Pullum (2002: 340-349) は、上記 (4) および (5) に見られる「数」概念と形式のミスマッチを大きく二つに分けている。「複数形のみを持つ名詞 (plural-only nouns: PON)」と「-s 語尾を持つ単数形名詞 (singular nouns with the -s ending: SNS)」である。さらに前者は、「そもそもそれに対応する単数形が存在しないもの」と「複数形と同じ『意味』を持つ単数形は存在しないもの」に分けられ、形式的には、「-s 語尾をとるもの」と「-s 語尾をとらないもの」に分けられる。

2.1 -s 語尾をとる PON

この典型例は、(5b) でも示したズボンやハサミのような「二裂・対もの (bipartites)」である。(6a) は下半身衣料、(6b) は対になった器具類、そして (6c) は両眼用のレンズ付き器具である。ただし、上下全身にわたる衣料の [オーバーオール] は、Br[itish]E[nglish] では overalls であるが、Am[erican]E では単数の overall となる。[秤] も BrE は scales であるが、AmE では scale と単数扱いになっている。

(6) a. *pants, trousers, jeans, overalls, etc.*

b. *scissors, scales, nutcracker(s), etc.*

c. *binoculars, glasses, goggles, etc*

— Huddleston & Pullum (2002: 341)

また、「粒子から成る物質」もこのグループに属し、oats [オーツ麦] がその典型である。したがって、*one oat, *two oats, *several oats, *how many oats などは決して認められないが、?much oats は量を問題にしているので、形式的には確かにごちないにもかかわらず容認度が上がる。

(7) *Oats have the highest fat content of any grain.*

— 『ジーニアス英和辞典』(2006⁴⁾: s.v. *oats*)

次は、arms [武器], clothes, dishes [in to do the dishes], valuables のような「entity [もの] の集合体」を表す複数形である。Huddleston & Pullum (2002: 343) は、以下の (8) からわかるように、その集合体を構成する要素を取り出す an item of や a piece of という表現と、これらは共起できないとしているが、久野・高見 (2009:

15) は, *one of her valuables* の *one of* は問題ないと指摘している.

- (8) a. an item of *clothing* / *an item of *clothes*
 b. a piece of *jewellery* / *a piece of *valuables*

明確な境界がない [もの] の複数性を表す複数形としては, *bushes*, *mountains*, *woods* などがある. 例えば, 次の *bushes* には, (9a) の可算の解釈 [低木] と (9b) の不可算の解釈 [雑木林] がありうる.

- (9) a. We should plant a few *bushes*.
 b. He threw it in the *bushes*. / *He threw it in two *bushes*.

— Huddleston & Pullum (2002: 343)

2.2 -s 語尾をとらない PON

典型例は, *genitalia* (= *genitals*) [生殖器], *minutiae* [詳細], *regalia* [式服] のような, 対応する単数形を持たない「外来複数形」である. ただし, (10) に示されるように, 対応する単数形を持つものでさえ, そのオリジナル単数形の使用頻度が極めて低いために, オリジナル複数形である *data* や *agenda* の方がむしろ「単数形」であると捉えられ, -s 語尾による新たな複数形 *datas* や *agendas* が作られる場合もある³⁾. 当該語句の認知度・使用度の高さが影響している例であろう.

- (10) a. *datum* [s(in)g(ular)], *data* [pl(ural) / sg.], *datas* [pl.]
 b. *agendum* [sg.], *agenda* [pl. / sg.], *agendas* [pl.]

— Huddleston & Pullum (2002: 1590-1592)

また, 「不変化」PONとして, その他に *cattle*, *police*, *folk*, *people*⁴⁾ などを挙げるができるが, 前二者と後二者では振る舞いが違う. Huddleston & Pullum(2002: 345)によれば, 同じ複数概念を表すにしても, *cattle* と *police* は, 「低い数字 (low numerals)」との共起は許されないが, *folk*⁵⁾ と *people* は最低限の *two* と共起できる.

- (11) a. a thousand *cattle*, *seven *cattle* Cf. seven *cows*
 b. two hundred *police*, *four *police* Cf. four *policemen* / four *police officers*
 c. these three city *folk*, two *people*

ところが, 久野・高見 (2009) が次のような使用例を AmE と Aus[tralian]E に見いだしている所を見ると, この制約に関しては, どうやら地域差が生じているようだ.

- (12) a. AmE: ...but this time in Washington state, where two *cattle* were found to be infected with the disease
 —久野・高見 (2009: 73)
 b. AusE: ...two *police* were slightly injured.
 —久野・高見 (2009: 75)

この地域差は, かたまり名詞としてだけでなく, 上例 (11) のように複数可算名詞としても機能できるか否かという点において, 次の *staff* と *crew* にも現れるのである (久野・高見 2009: 96-99).

- (13) a. AmE: much *staff*; *many *staff* [many *staffers* / *staff members*], *a *staff*
 b. BrE: much *staff*; many *staff*, *a *staff*

- (14) a. AmE: much *crew*; *ten *crew* [ten *crewmen* / *crew members*], *a *crew*
 b. BrE: much *crew*; ten *crew*, a / one *crew*

特に *crew* の場合, BrE では, 「単複同形」として機能する点に注目しておきたい.

さらに, いわゆる「集合名詞」を単数扱いにするか複数扱いにするかにも地域差が生じている⁶⁾.

- (15) a. AmE: My *family* is pretty open-minded about different kinds of people.
 b. BrE: My *family* are pretty open-minded about different kinds of people. —久野・高見 (2009: 110)

2.3 -s 語尾をとる単数名詞 (SNS)

Huddleston & Pullum (2002: 345) によれば, まず, (the) *bends* [減圧症], *rabies* [狂犬病], *shingles* [帯状疱疹] のような「病気の名称」が挙げられる.

- (16) a. *Shingles* is / *are often excruciatingly painful; I hope I never get it / *them.
 b. *hiccups*, *measles*, etc.

ただ, 同じ病名でも (16b) は, 彼らの見解では, (17) に見られるような「通常の複数形の単数用法」と考えられている.

- (17) a. A very pleasant three *days* was spent with Kim's aunt in Brington. Cf. many a day [単数呼応]
 b. Three *ounces* of sugar is rather too much. — Huddleston & Pullum (2002: 346)

また, 歴史的には複数を表す-s 語尾を持つ, -ics に終わる, *acoustics*, *politics*, *phonetics*, *gymnastics* といった

「学問名」もこの SNS の典型であるが、(18b, c) に見られるように、いわゆる複数形として機能する場合もある。その場合意味は一段と抽象性が増し、それぞれ、[音響効果 (18a)], [政見 (18b)] となる。

(18) a. The new concert hall has two distinct *acoustics*.

b. His *politics* are somewhat to the right of my own.

— Huddleston & Pullum (2002: 347)

最後に, billiards, dominoes, darts, cards のようなゲームの名称もここに分類される。

(19) a. *Billiards / Dominoes* is one of my favorite games.

b. I've only three *dominoes* left.

— Huddleston & Pullum (2002: 348)

もちろん, (19b) のように, 例えばドミノというゲームを構成するパーツである個々のドミノは, 通常の複数可算名詞として取り扱われることは言うまでもない。

以上のことから明らかになった点は, (20) のようにまとめられる。

(20) a. sweater など上半身を覆う衣類については, 対称をなす袖が二つあっても複数形にはしない。

b. *these glasses* は「この眼鏡 (単数)」と「これらの眼鏡 (複数)」の両義に解釈できる。

c. 集合名詞には, その境界がはっきりしているものとそうでないものがある。

d. 一般的な使用に耐える外来語の複数形は, 形態的に複数形であることが認知されにくいので, その結果単数形と捉えられ, -s 複数形を新たに生じる可能性がある。

e. 地域差 (AmE か BrE かなど) がある。久野・高見 (2009:123) によれば, AmE は「形」を重視する傾向にあり, BrE は「意味」を重視する傾向にある。

f. -s 語尾を持つ単数名詞は (AmE においても), その「形」ではなく, 「意味」によって一致する動詞の形態が判断されている。

3 単複同形

3.1 PDE における単複同形

Huddleston & Pullum (2002: 1588-1589) は, 単複同形を単数・複数間の融合 (syncretism) と捉え, 下例 (21b) のように複数形が単数形と同一の形式をとり, 語彙的基底部 (lexical base) として機能するものと定義している。以下, 彼らの分類を見ていくことにする。

(21) a. A *sheep* has escaped.

b. Two *sheep* have escaped.

— Huddleston & Pullum (2002: 1588)

典型的には, 食用狩猟魚である carp, cod [鱈], mackerel [鯖], salmon, trout [鱒] や狩猟鳥獣を表す (22a-c) のような名詞にこの単複同形が見られる。

(22) a. *bison*^{?)}, *deer*, *moose* [北米ヘラジカ], *swine*, *grouse* [ライチョウ]

b. *elk* [欧亜ヘラジカ], *reindeer* [トナカイ], etc.

c. *elephant*, *giraffe*, *lion*, etc.

d. They were hunting *elephant*.

— Huddleston & Pullum (2002: 1588)

これらの中でも, (22a) は単複同形のみを持つもの, (22b) は通常の-s 複数形も同時に持つもの, そして (22c) は通常は-s 複数形をとるが, 限定的に (22d) のように単複同形が使用される場合があるものといった具合に, それぞれ単複同形の現れ方に差異が生じている。

ここで奇妙に思えるのは, (22a) のグループが「狩猟鳥獣」とされているのに, そこに家畜である *swine* が含まれている点であり, 典型的な単複同形の, 家畜である *sheep* はどこに属するべきなのかという点である。どうやら基本的に群れをなして行動する魚類や鳥獣類に単複同形をとるものが多く見られるようだが, 前者は, 種類を表す場合を除いて, 必ずと言っていいほど単複同形になる一方で, 後者は通常の-s 複数形も平行して使用される点で異なる分布を見せている。このことは, 「牛・鹿・豚・羊・山羊・鳥」を表す類似した単語の複数形を調べてみると一層明らかになる。

(23) a. *oxen* [去勢した雄牛], *bulls* [去勢しない雄牛], *steers* [去勢された雄の食肉用牛],

cows [雌牛], *heifers* [子を産んでいない若い雌牛], *calves* [子牛]

b. *hart(s)* [雄鹿], *stag(s)* [雄鹿], *buck(s)* [雄鹿], *hind(s)* [雌鹿], *doe(s)* [雌鹿]

- c. *pigs, hogs* [雄豚], *sows* [雌豚]
 d. *rams* [雄羊], *ewes* [雌羊], *lambs* [子羊]
 e. *goats* [山羊], *kids* [子山羊]
 f. *birds* [(獵)鳥], *fowl(s)* [家禽]

上例 (21a, b) も含めてわかることは、狩猟獣である「鹿」類が最も単複同形をとりやすいということである。また、(23c) より、「豚」類では、*swine* のみが単複同形で使用されることになるが、辞書には「集合的」や「古風」の記述が見られる⁸⁾。しかし、*sheep* については、そのような記述もなく、(23d) に見られるように *sheep* 以外の「羊」類は普通に -s 複数形をとるのである。したがって、*swine* も *sheep* も「有標複数形」に違いないが、その有標性には大きな違いがあると言っている。

次に、デフォルトの語彙の基底部が歯茎摩擦音の /s/ や /z/ で終わる名詞も単複同形となる。(24a) はそれらが複数の -s 語尾に由来し、(24b) はそれぞれ、外来語である古典ラテン語の第 5 変化名詞 *series*, *species* に由来する。

(24) a. *barracks, crossroads, headquarters, innings*⁹⁾, *means, etc.*

b. *series, species, etc.*

c. *Japanese, Chinese, Portuguese, Swiss, etc.*

— Huddleston & Pullum (2002: 1589)

上記 (24c) の /s/ や /z/ で終わる国民名に加えて、/s/ や /z/ で終わらなくても、種族や民族名は単複同形となるようだ。

(25) *Apache, Bantu, Bedouin, Hopi, Inuit, Navaho, Sioux, etc.*

— Huddleston & Pullum (2002: 1589)

その他にも、*craft* [小型船舶] や *offspring* [子孫] が挙げられる。さらに、*policeman* と *policemen* は、綴りの上では区別されるが、発音上はどちらも /pəli:smən/ になり区別されないで「単複同音」であると言え、逆に *corps* [軍団] は形態的には単複同形だが、発音では /kɔə/[sg.] と /kɔəz/[pl.] になり、「単複異音」(ここでは -s がまさしく *audible plural morpheme* [Pavey 2010: 27] として機能している) である。

3.2 SAE 古典語及び OE・ME における単複同形

以上 PDE における単複同形名詞の分布を見てきたが、次に、高度屈折語であった SAE 古典語において果たして単複同形は可能だったのかということを確認しておく。

まず、(26a) のように、古典ギリシア語の第 3 変化名詞の主格複数形は、-us や -os という単数語尾をそれぞれ -ues や -oes に変化させるパターンだけでなく、単複同形も可能だったらしい。

(26) a. *ikhthys* [cf. *ikhthues*] “fish”, *heros* [cf. *heroes*] “hero(es)”

— 古川 (1958: 354-355)

b. OE *hæleð* [cf. *hæleðas*] “hero(es)”

興味深いのは、近藤・藤原 (1993: 39) によれば、OE においても、ギリシア語と同じ [英雄] を表す *hæleð* は、強変化男性名詞複数語尾の -as を持つ形だけでなく、単複同形が存在したということである。

さらに、(24b) でも触れたように、古典ラテン語の第 5 変化名詞は、その主格複数形が単複同形であり、他に複数形はない¹⁰⁾。ちなみに、ラテン語で [魚] は、第 3 変化名詞 *piscis* であり、その複数形は *pisces* のみである。ギリシア語と違って単複同形は持っていない。

(27) a. *dies* “day(s)”, *res* “thing(s)”

— Allen & Greenough (2006 [1903]: 39-40)

b. *series* “series”, *species* “appearance(s), kind(s)” (= 24b)

このように、高度に屈折する SAE 古典語にも、「格」の融合だけでなく、「数」の融合も一部存在したことが理解できる。

では、OE での状況はどうだったかと言え、すでに上例 (26b) に、単複同形を持ちうる「強変化男性名詞」*hæleð* の例を挙げたが (その他には、*monap* “month” を挙げることができ、これは -as 複数形を持たず、単複同形のみの変わり種である¹¹⁾)、実は、単複同形になる主たるグループはむしろ、「hus 型強変化中性名詞」だったのである。以下の (28) に、Sweet & Davis (1953: 12) と児馬 (1996: 35) に挙げられている例を分類して示す。ただし、*cild* と *wæter* については、-(r)u 語尾による複数形も存在した。また、「hus 型強変化中性名詞」ではないが、単数に -or 語尾を持つ「血縁関係を表す語 (kinship terms)」に一部単複同形を生じるものがある。しかし、それは単独で現れるわけではなく、そういう場合も -ru 語尾が同時に現れる (例えば、*broþor* “brother” の複数形は *broþor* もしくは *broþru* である)。

(28) a. *deor* “wild beast”, *sceap* “sheep”, *swin* “swine”

- b. *hus* “house”, *cild* [cf. *cildru*] “child”, *flod* “flood”, *folc* “people”, *gear* “year”,
mod “mind [mode]”, *þing* “thing”, *wif* “woman [wife]”, *word* “word”, *hors* “horse”
c. *gold* “gold”, *water* [cf. *wateru*] “water”, *ban* “bone”, *land* “land”
d. *bearn* “child”, *lic* “body”, *gemot* “meeting”, *werod* “troop”

ところで、なぜ (28a) の *deor* が一般的 [動物] から [鹿] を指すようになったかについて、Horobin (2010: 101-102) は次のように複数の要素が絡んでいたと説明している。

- (29) a. ME 期にフランス語から [動物一般] を表す *beast* が借入され、*deor* に取って代わった。
b. ME 期に [鹿] を表す語は *hert* (< OE *heor(o)t*) であったが、[心臓] を表す *herte* (< OE *heorte*) と発音上非常に紛らわしい状況にあった (homophonic clash)。
c. (29b) の状況は、*hert* に意味そのものではなく、「使用域 (register)」上の制約をもたらしたため、*hert* は次第に狩猟の専門用語と見なされるようになった。
d. その結果、一般的 [鹿] を指す意味に空き間が生じ、行き場の無くなっていた *deor* が意味を特殊化すること (specialization) でそれを埋めることになった。

さて、こうして改めて英語史を振り返ってみると、(28a) に見られるようなほんの一握りの語のみがいわゆる単複同形として今日まで受け継がれてきていると言え、(28b) の普通名詞はすべて -s 語尾による複数形に置き換えられてしまっていることがわかる。(28c) は、かたまり名詞の機能が主たるものだが、可算名詞として扱われる場合には、-s 語尾による複数形が使用され、単複同形は放棄されている。そして、(28d) は方言などを除き、標準形からは全く姿を消してしまった。

ちなみに、*fish* は、PDE では単複同形だが、実は OE 期には、一般的な強変化男性名詞 (*fisc* [sg.]; *fiscas* [pl.]) であった。したがって、*fish* は OE 以降新たに単複同形になったということになる。そしてこれに関連してさらに気がつく点は、PDE で単複同形として扱われる、3.1 節で言及した *carp*, *cod*, *mackerel*, *salmon*, *trout* などの魚類を表す語が全く見あたらない点である。これらの語は、寺澤 (1997) によれば、以下のように *trout* を除いてすべて ME 期に借入されたものだからである。

- (30) *carpe* < O[Id]F[rench] [1393]; *cod* < ? [1357]; *makerel* < A[nglo]-F [c1300];
sa(l)moun < AF / OF [1228]; *truht* < Late Latin [late OE]

では次に、(28a-c) の OE 単複同形名詞が、屈折体系が崩壊しつつあった ME 期にはどのような形で現れていたかを見てみることにする。MED に記載されている複数異形の主なものは以下の通りである。なお、(early · late) は、初期・末期形態を、(Kent) などは、地方方言形態を示している。

- (31) a. *der(e, deres, etc., (early) deoran, deoren, (late) deare; shep(e, etc., (early) sceap, scepen,*
(early South West Midlands) sheapen, sheop, etc.; swin(e, (Kent) swines
b. *houses, (early) husas, housen; (early) child, childre, childer(e, etc., children, childeren, etc., childres;*
flodes, etc.; folk, folkes; yeres, etc., (early) zeren, etc.; modes; thinges, etc., thing(e, thing(g)us,
(early) þinhes, þingen; wif(e)s, etc., wivise, wivus, wi(f)wes, wif, wive, (early) wiva;
wordes, wordise, word(d)us, (early) word(e(n, wored, woerdes; hors(e, heors(e, horses, horsen
c. *gold; wateres, etc.; bones, (early) ban, bon; londes, lond(e, etc.*

この中で、少なくとも *house*, *flood*, *mode*, *water* に関しては、ME 期を通じて単複同形はもはや現れず、既に -s 複数形に完全移行していることがわかるし、方言形や初期形態を除けば、*year* や *word* もほとんど同様の振る舞いをしたと言っている。

強変化男性名詞の *month* および *fish* と ME 期に借入された魚類名詞についてもここで見ておこう。

- (32) a. *monthes, etc., (early) monþas, (North) munth; fisshes, etc., fische, etc.*
b. *carpe, carpes, carpis; codde, coddas, coddys; makerel, makerels; samounes, sa(u)moun, samen, etc.;*
troutes, etc., troztes, trute

そして、OE から ME への複数形語尾の変遷をまとめると次のようになる。

- (33) a. OE 強変化男性名詞語尾 -as > ME -es (-is / -us)
b. OE 強変化中性名詞の一部と単数が -or に終わる名詞語尾 -ru > ME -re / -er
c. OE 弱変化名詞語尾 -an > ME -en

以上のことから明らかになった点は、(34) のようにまとめられる。

- (34) a. PDE では、基本的に群れをなして行動する魚類や鳥獣類（狩猟獣・家畜）を表す名詞に単複同形をとるものが多く見られる。特に、「鹿」類が最も単複同形になりやすいと言える。
- b. しかし、それらが種類を表すためにではなく通常の-s 複数形をとる場合も珍しくなく、逆に同種の動物カテゴリ内において、-s 複数形しかとらない語も存在する。
- c. barracks など、通常とは逆の、複数用法から単数用法に拡大された結果、単複同形を生み出しているものがある。
- d. 形態上の単複同形だけでなく、発音上の単複同音もありうる。
- e. 高度に屈折する SAE 古典語においても、単複同形は許容されていた。
- f. fish の単複同形が ME 期に使用され始めたことをはじめとして、魚類を表す単複同形名詞の多くは ME 期に借入されている。
- g. OE の単複同形名詞は、その多くが ME 期に「類推」によって -en や -es などの複数語尾を付加され、最終的に通常の -s 複数形として定着していくが、一部のものはその規則化を頑なに拒否し、単複同形形態を現在にまで受け継いでいる。

4 ディスカッション

前二節の (20) および (34) で明らかになった事柄を踏まえて、本節では、英語の単複同形名詞に見られる特異な「数」概念の認知に関連して、主に次の点を議論していく。

- (35) a. 屈折が基本である言語において単複同形が許容されたこと
- b. 利用可能な屈折体系が崩壊しつつあった ME 期に新たに単複同形が現れた理由
- c. 「類推」による画一化に抵抗した単複同形の有標性を支えるもの
- d. 「形」と「意味」の一致・不一致と地域差との関係

まず、(35a) の、英語が属する SAE の古典語においても単複同形は可能だったという点を考えてみる。単複同形を機能的に見た場合、高度な屈折語であったギリシア語やラテン語では、たとえその一部に単複同形名詞が含まれていたとしても、その文法「数」を明示的に表示可能な、それに付随する限定詞や形容詞などの他の手段を十分に利用できたので、特段の不都合は生じなかったものと思われる。例えば、現代 SAE においてでさえも、高度な屈折をいまだに維持しているドイツ語では、一部単複同形名詞が存在するが、*der Onkel* “the uncle” [sg.]; *die Onkel* “the uncles” [pl.] (濱川 2002³: 1803) などのように「数」を明らかにできる。さらに、フランス語では、*pas* や *voix* といった単複同形名詞があるだけでなく、単語の多くが形態的には -s 語尾で複数形を作るにもかかわらず、それ自体が発音されないために音声的には単数形と同じになってしまう「単複同音」を引き起こす。しかし、*la fille* /fij/ “the girl” [sg.]; *les filles* /fij/ “the girls” [pl.] (石井他 1993: 1373) などのように定冠詞が「数」によって変化するので、たとえ目的語に生じた場合でも複数を単数から区別できるのである。同じことは屈折が完備していた OE にも当てはまり、*þæt hus* “the house” [sg.]; *þa hus* “the houses” [pl.] のように単複同形は問題なく処理できる。

ただ、SAE 古典語の場合、実際これだけ複雑な屈折体系を持ちながら、そもそも「数」を表示しないこと自体がなぜ奇異に感じられなかったのか、という疑問は依然として残る。

これに関連して、実は、OE の「*hus* 型強変化中性名詞」は元来単複同形をとってきたわけではないという事実がある。Smith (2009: 98) によれば、その語幹が「長音節 (long syllable = 長母音または短母音 + 重子音を持つ音節 [Mitchel & Robinson 2007⁷: 20])」もしくは「二音節」からなるこのグループは、当初 **husu* に見られるような -u 語尾による複数形をとっていたが、語幹の音韻環境の影響を受けて -u 語尾が脱落した結果¹²⁾、単複同形になってしまったのである。つまり、OE の単複同形名詞も、もともとは他の名詞同様、「数」が認知され、明示的に表示されていたのである。同様の語尾の脱落は、OE *fof* “foot” [sg.]; *fet* “feet” [pl.] (< Old Saxon *fofi* [pl.]) のような「ウムラウト複数」のグループにも起きているが (児馬 1996: 37)、語幹が変化しない「*hus* 型強変化中性名詞」複数形では、単数形と区別する要素がないために単複同形が生じたことになる。もちろん英語史全体を見渡せば、最終的に (28b) の単複同形名詞は (34b) を経て、通常の -s 複数形のシステムに組み込まれてしまっている。単複同形という不都合は解消されている。問題は、しかし、(35b, c) の議論点とも関連するのだが、そうならなかった (28a) の *deer*・*sheep*・*swine* や ME 期に新たに獲得された *fish* などの単複同形の存在である。

このことは、Trask (2010: 36) が “Early English speakers seemingly no longer kept track of so many different plural forms, and they began to extend some of the plural forms analogically to words which had previously not taken these plural forms.” (下線は筆者) と指摘する傾向とは明らかにかけ離れていると言わざるを得ない。さらに、これに関連して、Barber, Beal & Shaw (2009²: 48) は、 “The unusual noun-plural forms in present-day English, which are the ones that have managed to resist the analogy of the plural in -(e)s, are mostly very common words, like *men*, *feet* and *children*, or at any rate are words which *were* very common a few centuries ago, like *geese* and *oxen*.” (下線は筆者) と述べており、commonness に有標形が温存される傾向を指摘している。ただこの議論は、(28a) のようなもともと単複同形であったものにはうまく当てはまるが、fish のようにわざわざあとから有標形を獲得した例は説明し難いと言える。

もう一度問題を整理してみよう。単複同形という形式自体は、当該言語が高度な屈折体系を維持している間(例えばOE期)は何ら問題を引き起こさない。しかし、特に英語においてME以降それが単純化されるにつれて、単複同形の持つ曖昧性がクローズアップされるようになってくるのは理の当然である。ちょうどその頃、屈折体系崩壊に伴い-s 複数形が台頭し始めていたことから、多くの単複同形名詞は、-s 複数形に鞍替えることで文法「数」を明らかにする手段を新たに手に入れていった。そもそも「hus 型強変化中性名詞」は、単複同形になる以前は屈折していたわけだから、再度屈折による複数形に戻ることに障害はなかっただろう。また、例外的に単複同形をとった強変化男性名詞の一部や-or に終わる血縁関係を表す単数名詞も軽々とこの流れに乗って行けたであろうことは想像に難くない。

ところで、Bybee (2010) が提唱する「用法基盤文法 (Usage-based Grammar)」では、上述の Trask や Barber, Beal & Shaw からも指摘している「類推 (analogy)」が極めて重要な役割を果たす。

(36) ... analogical processing is the basis of the human ability to create novel utterances. In this context, it is important to note how much of speech and writing is constituted of prefabricated word sequences. These conventionalized expressions and constructions serve as the basis for the application of the domain-general process of analogy. ... in diachronic change, ... it is the same processing mechanism that is responsible for the changes identified traditionally as analogical. — p. 75

そしてその定義としては、“the use of novel item in an existing pattern, based on specific stored exemplars” や “the process by which a speaker comes to use a novel item in a construction” (p. 57) ということになるわけだが、Bybee (2010: 66-69) は、特に言語変化における類推をさらに「類推的水平化 (analogical levelling)」または「規則化 (regularization)」と「類推的拡張 (analogical extension)」に分類しており、言語の形態面に関して言えば、後者は前者ほど普通ではないとしている。また、後者は「マイナーな構造」の拡大に、前者は「より生産的な構造」に適用される傾向にあることが指摘されている。

そうすると、英語の複数形をめぐる議論では、-s 複数形へ規則化するという流れは明らかに類推的水平化であると言える。そして、(35c) で指摘したように、この流れに抵抗したのがウムラウトによる複数形・-en 複数形・「一部の」単複同形であったわけだが、これも Bybee (2010) で十分に説明がつくと思われる。例えば、ここで /i:i:p/ という音韻構造を持つ動詞の過去形形態の分布を見よう。

(37) a. *leap, leapt, leaped* / *creep, crept, crepted*

b. *keep, kept, *keeped* / *sleep, slept, *slepted*

— p. 66

(37a) の動詞においては、新しい規則的-ed 過去形も容認されるが、(37b) の動詞では、それが認められないのは、(37a) はその使用が「低頻度 (low-frequency)」であるのに対して、(37b) は「高頻度 (high-frequency)」だからである。つまり、個々のアイテムの使用頻度が言語変化に大きな影響を与えるということであり、“certain exemplars of older constructions can be retained in a language despite the development of a newer, more productive construction” (p. 67) という現象が説明される。これを Bybee (2010: 75) は、“the Conserving Effect of high token frequency” と呼んでいる。前述した Barber, Beal & Shaw の言う commonness は、実は、この high-[token-]frequency に他ならない。

ただ、単複同形の場合、ウムラウトによる複数形や-en 複数形と違って、形態的に「ゼロ形態素 (zero morpheme [Bybee 2010: 177] ; null morpheme [Pavey 2010: 27])」であるために、その多くは高い使用頻度にもかかわらず、明示的形態変化を伴う-s 複数形に移行したと考えられる。したがって、「高使用頻度による保存効果」と「形態変化による『数』の表示」という二つの制約が競合した場合、後者が優先されることが明らかになった。だとすると、PDE まで綿々と受け継がれている一握りの単複同形名詞の存在はますます異様に映って

しまう。

そこで、それらが ME 期以降単複同形として扱われてきた理由を (38) に考えてみた。

- (38) a. OE の強変化中性名詞 *scip* “ship” [sg.]; *scipu* [pl.] が ME 期に *ship* [sg.]; *ships* [pl.] に変化したことと、特に ME 終盤から「大母音推移」によって発音が *ship* にさらに似通ってきたために、*sheep* は、*sheep* [sg.]; **sheeps* [pl.] という変化パターンを獲得できなかったためではないか。ここには、上記 (29b) で指摘された *homophonic clash* という現象を見ることができる。
- b. OE 期に〔野生獣〕一般を指す *deor* が単複同形のまま使われ続けたのは、狩猟の対象だったからではないか。つまり、狩猟という行為が、上記 (22d) で見たように、その対象に単複同形を要求すると考えられる。それを意味が特殊化した *deer* が引き継いだのではないか。ちなみに、*hart* は、ME 期には単複同形が現れないことから、ME 以降 *deer* の単複同形に引きずられて単複同形となり、さらに狩猟獣の代表である「鹿」類全体が同様に単複同形を採用していったと考えられる。
- c. *swine* は、PDE では「古風」ということから、*sheep* や *deer* ほどの存在感は既になくなってしまっているが、ME 期を通じて単複同形が維持された部分も確かにあった。これは、*cow* の ME 期複数形 *kine*¹³⁾ との音韻・形態的類似から *-s* 複数形になりにくかったと考えられる (註 13) 参照。
- d. *fish* については、ME 期に借入された魚類名詞が単複同形であったことからの類推的拡張と考えられる。

しかし、たとえ仮に (38) のような事情があったとしても、ME の一時期とは言え、上記単複同形名詞に *-s* 複数形が現れたという紛れもない事実は、初期英語の話者たちが「数」概念を表示する何らかのマークが必要であると認知したことの証左である。それでも、なぜ最終的に単複同形の方が選択されたのかと言えば、「数」をうまく表示できないという不都合を凌駕するような要素が立ち現れたからに違いない。一つの可能性、それは、標準形英語文法における「規範性」であり、「威信 (prestige)」ではなかろうか。つまり、PDE ではほとんど意味をなさない三人称単数現在形動詞語尾の *-es* が今なお後生大事に温存されていることと平行的な現象とすることができるだろう¹⁴⁾。おそらく ME 終盤から初期近代英語 (E[arly]Mod[ern]E) 期にかけての標準形形成期に、上記 (38) のような理由などで何とか生き延びていた一握りの単複同形名詞は、それ以降は、文法上の概念表示という役割を超えた、むしろ社会言語学的な意味合いを帯びることで標準形の中で生き続けているのではないだろうか。

SAE 諸語においては、複数形を別途用意することが文法体系的に見て全く普通であり、たまたま何らかの原因で単複同形が生じたとしても、それをカバーする他の文法手段がある場合が多く、そこには何も問題は生じない。しかし英語の場合、確かに初期の頃にはそれらの手段を完備していたが、最終的にそれらを失ってしまったのである。にもかかわらず、(しかもほんの一握りの) 単複同形を温存しているということは、文法「数」に関わる認知的次元とは全く別の次元で、それを死守する理由がなくてはならない。その理由が標準形文法体系を支える屋台骨である威信に関わるとすれば、これら単複同形の明らかな不規則性は、三単現動詞語尾 *-es* のような象徴的意味合いを帯びてくることになろう。Horobin (2010: 51) は、16・17 世紀に見られた、古典語であるギリシア語やラテン語に追いつきたいとする当時の英国知識人の *nationalistic pride* が標準形形成への大きな原動力になったとしているが、数少ない残された不規則性はしっかり「守り、学ぶ」ものだという点に、彼らは標準形の存在意義の一面を見いだしたのかも知れない。

最後に、(35d) の議論点と関連して、単複同形は「集合的」表示であるとする辞書等の説明を考えてみたい。なぜ集合体は単複同形をとりやすいのか。もし個々の魚や家畜などの存在が埋没するためにその大枠のイメージのみが前景として感じられるとすると、ちょうど (39a) の集合名詞のように、むしろそれは単数扱いになるはずである。しかし実際には複数扱いなのだから、(39b) の集合名詞的に、その構成員の方に焦点が当てられていることは明らかである。つまり、「形式」では大枠を表示しているが、「意味」は構成員の集合を表すのである。集団行動が常態化しているものは、認知的に大枠を捉えやすいが、その枠だけでなく個々の構成員も十分に認識できる形式が単複同形であると考えられる。

- (39) a. AmE: My *family is* pretty open-minded about different kinds of people. (= 15a)
 b. BrE: My *family are* pretty open-minded about different kinds of people. (= 15b)
 c. AmE: much *crew*; **ten crew* [ten *crewmen* / *crew members*], **a crew* (= 14a)
 d. BrE: much *crew*; ten *crew*, a / one *crew* (= 14b)

また、地域差ということから言えば、AmE では、明示的複数形を単数形として扱う *barracks* のような単複同形は許容しやすく (cf. 上例(17)), (39c) に見られる無標単数形を複数形として解釈する *crew* のような、一部

の単複同形は認められない。それに対して BrE では、その両方が許容されるようだ。(20e) で指摘された、合理的に「形式」を重んじる傾向にある AmE と「意味」を重んじる BrE との違いと言え、形式的「数」の認知という観点からは、AmE により厳格に反映されていると思われる。ただ、集合名詞の捉え方に関しては、Hundt (2009: 27-30) が以下の点を指摘している。

- (40) a. AmE の方がより古い慣行を維持している (すなわち、もともと BrE で単数扱いがなされていた)。
 b. BrE では、複数扱いは 17・18 世紀がピークで、19 世紀には減少に転じている。
 c. 20 世紀には、AmE が明らかに単数扱いで BrE を凌いでいる。
 d. しかし、17 世紀から 20 世紀に亘るコーパス調査の結果、AmE・BrE とともに長いスパンで見ると、単数扱いが優勢であることがわかり、両方言の初期段階において、単数扱いが普通でないとは言い難い。
 e. BrE に見られる複数扱いから単数扱いへの変化は、最近の革新ではなくて、英語が常備している潜在的オプションの復活とも考えられる。

確かにアメリカ英語の影響力は、20 世紀後半以降世界規模で広がっていると思われるが、我々の目に見える現象の全てがそのことで説明できるわけではないことを Hundt は戒めている。

5 まとめ

英語の単複同形に関する本稿での議論をまとめると以下ようになる。

- (41) OE 期の単複同形名詞は、元来屈折による複数語尾を持っていたので、その「数」の認知は正当に行われていた。たまたまそれが持つ特異な音韻環境により単複同形が生じたわけだが、高度な屈折体系が残されていたので特に問題は起きなかった。ME 期以降屈折体系の崩壊に伴い、単複同形の不安定感が増したため、その多くは、高使用頻度による保存効果にもかかわらず、-s 語尾による規則的複数形化の道を歩んだ。しかしその一部は、他の語彙との音韻的・形態的競合関係からむしろ単複同形を維持続けた。のみならず、折からの英語標準形形成時期という時代背景もあり、それらには標準形文法体系の威信を示す象徴的意味合いも付加されたために、現在まで放棄されずに存続できていると思われる。

註

* 本稿は、2010 年 7 月 10 日に開催された熊本言語学談話会 (KLC) での発表内容を発展させたものである。当日の参加者であった熊本学園大学の原口行雄氏と熊本県立大学の村尾治彦氏には貴重なコメントをいただいた。この場を借りて感謝の意を表します。

1) Whorf (1956 [1941]: 140) 自身は、"Concepts of time lose contact with the subjective experience of 'becoming later' and are objectified as counted QUANTITIES, especially as length, made up of units as a length can be visibly marked off into inches. A 'length of time' is envisioned as a row of similar units, like a row of bottles." と述べ、ホーピ語については、"Plurals and cardinals are used only for entities that form or can form an objective group. There are no imaginary plurals, but instead, ordinals used with singulars." であり、また、"[in Hopi] Our 'length of time' is not regarded as a length but as a relation between two events in lateness." として以下の例を挙げている。

(i) a. Hopi: They stayed until the eleventh day. (= SAE: They stayed ten days.)

b. Hopi: The tenth day is later than the ninth. (= SAE: Ten days is greater than nine days.)

Whorf はこのように length と lateness を比べて、前者はメタファー、後者は時間の流れそのものであるとしているが、ホーピ語が序数を使って時間を表すということは、「前後」という位置関係に置き換えていると考えられ、これもメタファーと言える可能性がある (県立大の村尾氏の指摘による)。

- 2) 久野・高見 (2009: 79) は、furniture や baggage を「物質名詞」と呼ぶことの違和感を払拭するために、もともとの mass noun という用語における mass が持つ「(形・大きさが不安定の) かたまり、集まり、集合」という意味に注目するよう提案している。本稿では、これに準じて従来の「物質名詞」を「かたまり名詞」と呼ぶことにする。
 3) Horobin (2010: 4) は、現在 media が単数扱いされることは普通だが、*medias はまだ許容されていないとしているが、将来的にはそうなる可能性もあると述べている。
 4) people には、「複数加算普通名詞 (久野・高見 2009: 64)」を表す (ii) の PON としての用法と「集合名詞」を表す

- (iii) の用法がある。
- (ii) *one *people* (= a *person*) → *people* (= *persons*)
- (iii) a. They are a very family-oriented *people*.
b. Similar customs are found among many *peoples*.
- 5) 不変化 PON だけでなく、folk は-s 語尾をとる PON としても機能する。Huddleston & Pullum (2002: 344) は、スタイル上インフォーマルだが、属格限定詞と共に起することで folks は family と同じ意味を持つとしている。
- (iv) My *folks* are pretty dumb.
- 6) しかし、Biber et al. (1999: 188) は、“a few collective nouns such as *family* and *crew* regularly take both singular and plural concord in BrE, although singular concord is preferred in AmE”としている。
- 7) 『ジーニアス英和辞典』(2006+: s.v. *bison*) には、「種類」という断りなしに-s 複数形も記載されている。同じく、『ジーニアス英和辞典』(2006+: s.v. *grouse*) には、「種類」という断りとともに-s 複数形も記載されている。
- 8) 『ジーニアス英和辞典』(2006+: s.v. *swine*)、『ウイズダム英和辞典』(2007: s.v. *swine*)、『ロングマン英和辞典』(2007: s.v. *swine*) など。なお、おもしろいことに、*swine* が人間に対して、[卑劣漢・好色漢]の意味で使われるときも、通常の-s 複数形だけでなく、単複同形も現れる。
- 9) これはクリケットの [イニング] を指す。野球の [イニング] には、もちろん単数形の *inning* もある。
- 10) Allen & Greenough (2006 [1903]: 40-41) によれば、古典ラテン語にも、単複同形のみならず、「単数形のみの名詞 (*singularia tantum*)」や「複数形のみの名詞 (*pluralia tantum*)」も存在していたという。前者には、*aurum* “gold”, *calor* “heat” などが属し、後者には、*Athenae* “Athens”, *optimates* “the upper classes”, *arma* “weapons” などが属する。
- 11) *hæleð* との形態的類似を考えると、何らかの理由で **monapas* の方が使われなくなったのだろう。しかし、ME 期には、以下の (32a) からわかるように、既に本来の-s 複数形を回復している。
- 12) この場合に限らず、母音の-u 語尾が脱落する背景には、McIntyre (2009: 51) が指摘する “Stressing only the first syllable of the words means that it is impossible to distinguish the type of inflection in the unstressed syllable” ということがあったのだろう。例えば、OE *faru* “going”[sg.]; *fara* [pl.] は、PDE では *fare* / *fares* になっており、その母音の発音は消失してしまっている。
- 13) OE では、*cow* は、*cu* [sg.]; *cy* [pl.] という風にウムラウトによって複数形を作っていた。そして ME 期には、これに-en 語尾や-s 語尾が付加された以下のような二重複数形も現れる (MED: s.v. *cou*)。
- (v) *kin, ki, kis, kie, kien; kun, kui, kuin; ken, kein*
- しかし、ModE 期になってから、-s 複数形である *cows* が新たに作られたのである (OED: s.v. *cow* によると、*cows* は 17 世紀以前には現れない)。(v) の ME 形は最終的に二重複数形 *kine* となったが、PDE では、「古風・方言」としてその姿を留めているにすぎない。このように *oxen* が頑なに標準形で不規則形を保っているのに対して、意味的に非常に関わりのある *cow* に対しては、あっさりと標準形に規則形を導入した英語話者のメンタリティーには理解に苦しむところがある。
- 14) もともとの発想は、コミュニケーションに不可欠な単数一・二人称の存在とは離れたところにある単数第三者を区別したい、特別視したいということの表れではなかったか。さらには、無生物主語の *It* や *That* などが意味的に軽いために省略されることが多いので、それらの存在を動詞の変化形で表すことができるという利点もある。

参考文献

- Allen, J. H. & Greenough, J. B. Ed. by G. L. Kittredge, et al. 2006 [1903]. *Allen and Greenough's New Latin Grammar*. Mineola, NY: Dover Publications.
- Barber, C., Beal, J. C. & Shaw, P. A. 2009. *The English Language: A Historical Introduction*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Bybee, J. 2010. *Language, Usage and Cognition*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 古川晴風. 1958. 『ギリシヤ語四週間』東京: 大学書林.
- Gally, T. 2010. Noun Countability and English-Language Pedagogy in Japan: A Re-exploration. *Komaba Journal of English Education*, vol. 1, 85-103.
- 濱川祥枝 監修. 2002. 『クラウン独和辞典』第3版. 東京: 三省堂.
- Horobin, S. 2010. *Studying the History of Early English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Huddleston, R. & Pullum, G. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hundt, M. 2009. Colonial lag, colonial innovation or simply language change? In Rohdenburg, G. & Schluter, J.(eds.) *One Language, Two Grammars?: Differences between British and American English*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, pp. 13-37.

- 石井晴一他 編. 1993. 『ジュネス仏和辞典』 東京：大修館.
- Jarvis, S. & Pavlenko, A. 2008. *Crosslinguistic Influence in Language and Cognition*. New York: Routledge.
- 児馬修. 1996. 『ファンダメンタル英語史』 東京：ひつじ書房.
- 近藤健二・藤原保明. 1993. 『古英語の初歩』 東京：英潮社.
- 久野暲・高見健一. 2009. 『謎解きの英文法 — 単数か複数か —』 東京：くろしお出版.
- Kurath, H. et al. (eds.) 1956-2001. *The Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.
- McIntyre, D. 2009. *History of English: A Resource Book for Students*. Abington: Routledge.
- Mitchell, B. & Robinson, F. C. 2007. *A Guide to Old English*. 7th edition. Oxford: Blackwell.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson & E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- 野村益寛. 2005. 可算名詞と不可算名詞の考え方. 『英語教育』, vol. 54, no. 17, 13-15.
- Pavey, E. L. 2010. *The Structure of Language: An Introduction to Grammatical Analysis*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Smith, J. J. 2009. *Old English: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Sweet, H. & Davis, N. 1953. *Anglo-Saxon Primer*. 9th revised edition. Oxford: Oxford Univ. Press.
(= 東浦義雄 編注. 1978. 『古代英語文法入門』 第7版. 東京：千城)
- 寺澤芳雄. 1997. 『英語語源辞典』 東京：研究社.
- Trask, R. L. 2010. *Why Do Languages Change?* Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Whorf, B. L. Ed. by J. B. Carroll. 1956. *Language, Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 安井泉. 2010. 『ことばから文化へ』 東京：開拓社.